

指示表現と動詞時制の親和性

—直示的時制, 照応的時制, 絶対時制—

西 村 淳 子

言語体系の観点からは異質とされる諸要素にも、発話行為という角度から見れば一定の共通点があり、これがテキストの中で相互に関係して一つの効果を増幅したり、干渉し合って複雑な効果を生み出したりすることがある。このことは、名詞や代名詞のような指示表現と動詞時制との関係にも当てはまり、統語的な役割の違いにも拘わらず、この二種類の表現はテキストにおいて一定の親和性を示し、共通の発話行為に貢献することがある。本稿では、指示表現と動詞時制との間にある共通点とこれらの要素がテキストにおいて示す親和性を、通常は指示表現の分析に用いられる「直示」や「照応」などの概念を用いながら分析する。これにより、指示表現と動詞時制の出会いによって生み出されるテキスト固有の効果を分析するための理論的基盤が整備されるはずである。

1. 「直示」(deixis) と「照応」(anaphore)

「直示」とは、「今」、「ここ」、「私」などの記号のように、この記号を発話するその発話行為を介してしか指示対象が確定できない指示の過程をいう¹⁾。この「直示」機能をもった記号が何を指示するかは、誰が、いつ、どこでこの記号を発話したかということに依存する。これに対して、直示表現ではない「ナポレオン」などは、誰が、いつ、どこで言おうが同じ人を指すことができる。どんな言語にも直示表現が存在し、非常に高い頻度で用い

られるということは、日常我々の話す言葉が、だれがいつどこで話そうとも変わらないような客観的な構成をもっているわけではなく、話し手を中心に、その発話行為に依存しつつ構成されていることを示している。簡単に言えば、談話の内容は、通常「今ここにいる私」を中心にした自己中心的構成をしているのである。

これに対し「照応」の方は、文脈の中の要素を介して指示対象を確定する指示過程である。直示が、指示を成立させるために話者の発話行為を経由するのに対し、照応は、文脈に依存して指示を成立させる。フランス語の *il* や *elle* などの三人称代名詞や定冠詞名詞、所有形容詞は照応機能を持つ記号の代表である。例えば、下の文の中で下線を引いた部分は前の名詞句 (*une femme, un gentilhomme, une jeune fille*) に照応している。

例(1) Il était une fois un gentilhomme qui épousa en secondes noces une femme, la plus hautaine et la plus fière qu'on eût jamais vue. Elle avait deux filles de son humeur, et qui lui ressemblaient en toutes choses. Le mari avait de son côté une jeune fille, mais d'une douceur et d'une bonté sans exemple; elle tenait cela de sa mère, qui était la meilleure femme du monde. (C. Perrault, Cendrillon²⁾)

昔々ある紳士が、世にも高慢ちきで気位の高い女と再婚しました。この女には女と同じような性格の娘が二人おりましたが、あらゆる点でこの女にそっくりでした。夫の方にも娘が一人おりましたが、類い希な優しさと善良さをもっていました。それは世界で一番優れた女性であった母から譲り受けたものでした。(C. パロー, シンデレラ)

照応関係 (左項の指示表現が右項の名詞句に照応)

elle, (de) son (humeur), lui → une femme, la plus hautaine...
 le mari, (de) son (côté) → un gentilhomme
 elle, (de) sa (mère) → une jeune fille

それでは、直示や照応をする要素とはどのような言葉なのかを見てみよう³⁾。

表 1. 直示, 照応機能をもつ指示表現

	直示	照応
名詞 代名詞句	je, tu, nous, vous (人称代名詞) ce (指示代名詞) ce livre (指示形容詞 + 名詞)	il, elle (人称代名詞) mon chapeau et celui de mon père (指示代名詞) le livre (定冠詞 + 名詞)
時間 空間表現	hier, aujourd'hui, demain (時間) ici (空間)	la veille, ce jour-là le lendemain (時間) là (空間)

使用された言葉「談話」の表す内容^{デイスクール}は、抽象的な言語体系^{メッセージ}とは異なり、一貫性をもった一つの世界「談話世界」を構成している。談話の中で「直示」は、話者の発話行為を介して談話世界と話者の世界を結びつける。そして、照応の方は、談話の構成要素間の関係付けをしながら、談話世界を構築する。直示の場合、談話の世界が話者の世界と同一であることが直示表現の性質上確実である。しかし、照応表現のような直示以外の指示表現では、談話世界と話者の世界の間接関係を記号が示すことはない。

2. 名詞の指示機能と動詞時制の実現

このように直示や照応という概念が代名詞や名詞句の指示機能のあり方を分析するために有効な概念であるということは間違いない。しかし、筆者は、直示／照応という対立が、指示表現にとどまらず、動詞時制にも認められると考えている。このことは、すでに多くの研究者によっても指摘されている。バンヴェニストは代名詞 je, tu が直説法現在や複合過去など

の諸時制（「説明」時制）と馴染みがよく、同じ種類の文体⁴⁾に属していること、また、三人称代名詞 *il* が単純過去などの現れる「語り」「歴史」と呼ばれる文体に属していることを指摘している。確かに、単純過去は三人称で用いられることが多く、一、二人称は少ない。またこのような指摘の他にも、動詞時制を照応として捉えようとする研究も近年少なからず生まれてきている⁵⁾。

とはいえ、動詞時制に指示機能があると主張しているわけではない。指示が談話の表す世界（以後「談話世界」と呼ぶ）に言語外の現実を取り込む働きをするのに対して、動詞の時制は、言語記号によって談話の世界に取り込まれた概念を関連づけたり、述定などの操作を行うことによって生み出されたメッセージを話者の発話行為として現実に結びつける。たとえば、次のような広告文を見よう⁶⁾。

例(2) Avec France Telecom	フランス・テレコムに入って
décrochez les étoiles	星を手に入れ
et Gagnez de nombreux cadeaux	たくさんのハイテク・プレゼント
High tech!	をもらっちゃおう!

例(2)の中で、指示表現の France Telecom（フランス・テレコム）は特定の企業を、les étoiles（星々）は「星」全般を指示し、指示対象をこの談話の世界に取り込む。他方、命令法の動詞 décrochez や gagnez はこの動詞が結びつける諸要素の概念操作によって成立したメッセージ（「フランス・テレコムに加入して、星を手に入れ、たくさんのハイテク・プレゼントをもらう」こと）を、命令、勧誘し、この企業の宣伝をするという話者の行為として、現実に働きかけるのである。

両者とも、話者の発話行為と言語体系に属する記号、そして談話の世界の関係付けの過程の問題であり、この過程は記号の「実現」actualisation と呼ばれている。名詞句の場合、冠詞や数などがその実現様態を表し、動

詞句の場合は、法、時制が動詞句とこれが述語として担う文全体の実現の仕方を示す⁷⁾。例(2)でいうと、les étoiles の les はこの名詞句が総称的指示のために用いられていることを示し、動詞の法、時制は、この文が命令という行為のために用いられたことを表す。したがって、指示表現と動詞時制とは、両者とも言語体系と談話、話者の現実を関係付けながらそれぞれの仕方で発話行為に寄与するのである。

3. 直示的時制，照応的時制

指示表現と動詞時制の共通の基盤を確認した上で、動詞時制に「直示」「照応」などの概念を適用してみよう。一見して、「直示」が直説法現在に通じることは明らかである。しかし、発話行為に依存して時を指定するという意味では、複合過去や単純未来なども直示的である。いわば、直説法現在が aujourd'hui (今日)、複合過去は hier (昨日)、単純未来は demain (明日) なのである。これらの時制に共通することは、時制によって時間に位置づけられる事態が発話行為の「現在」を基準にしていることである。改めて強調するが、「現在」という客観的な時が存在するわけではない。客観的には、発話行為の進展とともに「現在」は次々と過ぎ去り、新しい「現在」がやってくる。これが安定して定点であるかのような印象を与えるのは、どんなときも話者にとってはこれが実際に発話行為を行うことができる唯一の時間だからである。

これに対し、「照応」的時制が基準にするのは、発話行為の現在ではなく、文脈によって与えられた任意の時点である。「照応」的時制の代表的なものは、直説法半過去と大過去である。なぜなら、半過去は、様々な点で現在と似ている⁸⁾が、根本的に相違する点は、半過去の基準とする時が現在から過去の一点への移動を伴うことである。発話行為にとって「現在」は特権の時間であるが、その「現在」を離れると、基準時は発話ごとに指定する必要がある。そして、照応的時制が基準となる時点が必要とす

る程度は様々である。

統語的に非自立的：接続法，時制の一致による直説法半過去，直説法大過去，条件法現在，条件法過去，（ジェロンディフ，現在分詞節）

意味的に非自立的：直説法半過去，直説法大過去，直説法前未来，直説法前過去，など

日常言語においては，基準になる時は，文脈にではなく，非言語的状況によって与えられることもある（例えば話し手と聞き手が共に意識している出来事などがある場合など）。しかし，文学作品のように談話世界が閉じた世界を構成している「語り」においては，通常談話内にその基準が示されて照応が成立する。

4. 「直示」的時制／「照応」的時制と「説明」時制／「語り」時制

さて，ここで，改めて「直示」的時制，「照応」的時制を，バンヴェニストやヴァインリヒのいう「説明」時制／「語り」時制と比較してみよう。「説明」時制とは，人が「事実を目撃者として，直接の関係者として詳述する時の」⁹⁾時制，あるいは発話行為そのものから談話世界が話者の世界とつながる世界であることを表す時制である。これに対し，「語り」時制とは，話者の世界とは直接つながらない「過去の出来事を物語る」時制である¹⁰⁾。

「直示」的時制の定義である「発話行為を介して時間に位置づける」ということは，まさに話者の世界の中に事態を位置づけることであり，直示的時制は「説明」の時制なのである。

しかしながら，「照応」的時制は「語り」時制ではない。「語り」時制とは，「説明」時制に対立し，話者の世界からは独立した世界の出来事を表

す。「照応」的時制が他の基準に従属的にしか機能しないのに対して、「語り」の中心的な時制、単純過去は、談話の世界をそれ自身で完結させるため、自立的に働く。単純過去に置かれた事態は、どこから見て過去であるかを考える必要はない、いわば現在につながる過去の事態なのである。

しかし、単純過去の表す「現在につながる過去」とは一体なんなのだろうか。架空の物語の場合は比較的理解しやすい。桃太郎が何時の人なのか、どこに住んでいるのか、知る必要はない。「桃太郎」は、談話世界内部の人物であり、「私」の世界の出来事と関連づけて理解する必要はないのである。しかし、ナポレオンの場合は、歴史上実在の人物であるという点で、話者の世界とつながっているようにも見える。ここで、「1769年にナポレオンは誕生した」という文を見よう。時間的な指示表現1769年という年号は、キリストの誕生という歴史的出来事を通じて、我々の世界ともつながる世界の年を指示する。しかしながら、このような個別の出来事と歴史的時間の対応関係に話者の視点が介在する余地はなく絶対的である。したがって、誰がどこで話しても変わらない。この点で、固有名詞ナポレオンの場合も、単純過去の場合も同じである。もちろん、過去の出来事であるが、今の私と接点のある過去ではない。

次の例(3)(4)は、フランスの新聞ルモンド・ディプロマティック紙の記事“Enfants exploités”（搾取される子供達）の冒頭である。基本的には直説法現在や複合過去などの「説明」時制で書かれている報道記事だが、全体で59個の動詞の中に2ヶ所単純過去が現れる（例(3)の *décrivirent* と例(4)の *fut*）。

例(3) Plus de 211 millions d'enfants âgés de 5 à 14 ans sont contraints de travailler. Pour sensibiliser les opinions publiques à ce phénomène planétaire qui concerne surtout les pays en voie de développement mais n'épargne pas les Etats riches, l'Organisation internationale du travail (OIT) a pris l'initiative, le 12 juin 2002, à Genève, d'une « première journée mondiale

contre le travail des enfants ».

L'image de l'enfance occulte souvent la réalité vécue des enfants. Et celle-ci, dans de nombreux pays, ressemble toujours à ces cauchemars que décrivent au XIX^e siècle, dans des romans hallucinants, des auteurs comme Charles Dickens, Victor Hugo, Hector Malot ou Edmondo de Amicis¹¹⁾.

2億1100万人以上の5歳から14歳までの子供たちが働くことを余儀なくされている。とりわけ発展途上国に関わるが、豊かな国々も関与せざるを得ないこの地球規模の現象に世論の関心を向けるため、国際労働機関（ILO）は2002年6月12日にジュネーブで「第1回児童労働反対世界デー」を開催した。

子供時代に対するイメージは往々にして子供の生きている現実を隠すものである。だが、この現実とは、いまだに多くの国において、19世紀に、チャールズ・ディッケンズ、ヴィクトル・ユーゴ、エクトール・マロ、やエドモンド・デ・アミーチスなどが真に迫る小説の中で描いた悪夢に似ている。

ここで *décrivirent*（描いた）という動詞が単純過去に置かれているのは、この記事で報道している子供達の現状のようにこれが我々の世界の出来事ではなく、所与の歴史的出来事であり、我々が影響を与えることが出来ない世界の出来事だからである。報道の対象となっている事実とは明らかに次元の異なる「過去」、つまり、報道の素材として疑う余地のない歴史的事実なのである。

この記事の後半には次のような文も見られる。

例(4) Cette question des enfants-esclaves et du trafic dont ils sont l'objet avait fait la « une » des journaux, en avril 2001, lorsque fut découvert un navire battant pavillon nigérian - l'Etireno -, parti du Bénin et transportant des dizaines d'enfants qui devaient être vendus comme esclaves au Gabon.

この児童奴隷と児童売買の問題は、新聞の一面記事となったことがあった。それは、ベナンを出港し、ガボンで奴隷として売られるはずになっていた十

数名の子供たちを運んでいたナイジェリア船籍の艦船エティレノ号が2001年4月に発見されたときであった。

この記事の直接の報道対象は、国際労働機関ILOが2002年6月12日に「第1回児童労働反対世界デー」を催したという事実であり、これは、現在に続く過去、複合過去で表されている (l'Organisation internationale du travail (OIT) a pris l'initiative)。他方、エティレノ号が発見された事実は、例(3)の場合と同様、ここでの直接の報道対象ではなく、記事を支える素材である。したがって、これは、単純過去におかれ、報道により影響を受けない歴史的事実として扱われている (lorsque fut découvert un navire battant)。

ちなみに、新聞記事のような「説明」時制のテキストに単純過去が現れる場合、年代、日付、地名、人名などの絶対的指示表現と共起することが多い。例(3)でも、単純過去は「19世紀」や「チャールズ・ディッケンズ」などの作家名とともに現れ、例(4)では、地名「ベナン」、「ガボン」、「ナイジェリア船籍」、「エティレノ号」、「2001年4月」などの絶対的指示表現がともに現れている。

他方、ここで「新聞の一面記事になった」ことが大過去で表されている (Cette question... avait fait la « une » des journaux) のは、これが基準時となる「第1回児童労働反対世界デー」よりも以前の事実だからである。また、半過去で表された「ガボンで奴隷として売られるはずであった」 (qui devaient être vendus comme esclaves au Gabon) 事実は、主節の「発見された」(fut découvert) に一致し、同時性を表している。大過去も半過去も文脈によって与えられたそれぞれの基準時に照応しつつ、事態を位置づけているのである。

このように、単純過去は、話者(報道記者)が行う発話行為の影響下のない独立した世界を構成する時制(絶対時制)であり、半過去や大過去は文脈中に置かれた他の基準時に照応して、それとの関係で事態を位置づけ

る照応時制である。バンヴェニストやヴァインリヒがいう「語り」時制が話者とは接点のない談話世界を構成するのは、単純過去の実現過程、すなわち発話行為としての価値の生み出す効果である。例(3)(4)のような「説明」時制中心のテキストにおいてすら、単純過去は歴史的世界を構成する力をもっているのである。

半過去や大過去をアプリアリに「語り」時制に分類したヴァインリヒに対して、マンガノーは、半過去や大過去は両方の文体に現れるので、どちらの時制でもあると反論している¹²⁾。バンヴェニストもこれらの時制を両方の文体に分類している¹³⁾。しかし、本稿での考察に基づく限り「照応」的時制には、絶対時制のもつこのような働きはなく、どのような時制を基準にするかによって、話者の世界にも、これとは独立した世界にも実現すると考えられる。

ところで、直示の時制、照応の時制、絶対時制などはすべて、事態を特定の時間に実現するが、歴史的現在のような普遍的、あるいは非時間的な表現もあり得る。toujours（いつも）や il était une fois（むかしむかし）などの時間表現も特定時間への実現を妨げる。代名詞で言えば、on（人々）、quelqu'un（誰か）、personne（誰も）などはこれに当たる。動詞の場合は、特定時間への定位を積極的に曖昧化するような不定法、非時間的、普遍的真理などを述べる普遍的現在も特定の時間に実現しない時制と考えられる。

この他にも、指示表現には、普通名詞が用いられることもある。“paysan”（農夫）や“fils”（息子）などの普通名詞は、現実を共通の性質を通して抽象化して把握する働きがある。しかし、普通名詞のカテゴリー化機能の問題は、動詞時制とは直接関連しないので、ここでは考察の対象としない。

ここでこれまでに理論的に考察してきた指示表現と動詞時制の対応関係を簡単な表にしてみよう。

実際には、言語記号の価値は、文脈や状況によって変化するので、それぞれの記号の価値はテキストの中でしか確定できない。したがって、どん

表 2. 指示表現と動詞時制の実現様態

	直示	照応	絶対	非実現
名詞句 代名詞句	je, tu, nous, vous (人称代名詞) ce(指示代名詞) ce livre(指示形容詞 + 名詞)	il, elle(人称代名詞) mon chapeau et celui de mon père(指示 代名詞) le livre(定冠詞 + 名 詞)	Napoléon (固有名詞)	on personne
時間 空間 表現	hier, aujourd’hui, demain(時間) ici(空間)	la veille, ce jour-là, le lendemain(時間) là,	1789年(年 号) Paris(地名)	toujours Il était une fois
動詞 時制	直説法現在, 複合 過去, 単純未来, 命 令法	半過去, 大過去, 接 続法, 前過去, 前未 来, 条件法現在, 条 件法過去	単純過去	普遍的現在 不定法
動詞のそ 他の形	近接未来	分詞構文 ジェロンディフ		pouvoir vouloir devoir

な文脈でも上に挙げた記号がここに示したように働くわけではない。しかし、これらの記号の実現の仕方には、一定の類似性があり、テキストの中でも親和性を示すのである。

5. むすび

本稿は、言語体系のレベルでは異質な要素として別々に扱われる指示表現と動詞時制の間に、発話行為としての共通性やテキストにおける親和性があることに注目し、「直示」、「照応」などの共通の概念を用いて類似と相違を整理した。その結果、動詞時制の実現過程は指示作用とは異なるものの、次のような類似があることが明らかになった。

- ①動詞の実現過程にも直示のような話者の発話行為を中心に談話世界を

構成する仕組みが存在し、それは、話者の世界の出来事を表す「説明」時制と基本的に一致する。

②照応する指示表現、il, elle や le lendemain のように、直説法半過去、大過去のような時制は、文脈によって与えられた基準時に従属的に働く。

③これに対して、単純過去は、年号、地名、人名などの固有名詞などと同様、「絶対」時制と呼ぶべきもので、発話行為にも文脈にも依存せず、話者の視点を介することなく出来事を世界に位置づける。話者の世界から独立した「語り」の世界はこのような単純過去の実現過程から生み出される。

異なる諸要素の親和性はテキストにとって本質的な問題であり、さらに多くの具体的テキストの分析を通じて詳しく研究するに値する問題である。本稿の考察は、そのようなテキスト分析に理論的な基礎を提供するものである。

文献表

- BENVENISTE, E.: "Les relations des temps dans le verbe français", *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966. 岸本通夫監訳, 『一般言語学の諸問題』, みすず書房, 1966年。
- BERTHONNEAU, A.-M. et KLEIBER, G.: "Imparfait, anaphores, et inférences", *Cahiers Chronos*, 3, 1998, pp. 35-66.
- CHARANDEAU, P. et D. MAINGUENEAU: *Dictionnaire d'analyse du discours*, Seuil, 2002.
- CADIOT P., AZRIBI-HERTZ. Présentation, *Langages*, no.97, mars 1990, Larousse.
- DUCROT, O.: « L'imparfait en français », *Linguistische Berichte* 60, 1979, pp.1-23.
- FRANÇOIS, F.: "Linguistique de la langue et dialogue avec les textes, un point de vue", *La Linguistique*, vol.39, fasc.2/2003, pp.61-74.
- GOSELIN, L.: *Sémantique de la temporalité en français*, Louvain-la-Neuve, Duculot, 1996.
- IMPS, P.: *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Paris, Klincksieck, 1960.
- JARVELLA, R.J., W.KLEIN (ed.), *Speech, place and Action, Studies in Deixis and related topics*, John Wiley & Sons Ltd., 1982.
- LABEAU E., LARRIVEE P.: *Les temps du passé français et leur enseignement*, Rodopi, Amsterdam, New York, 2002.
- LEEMAN-BOUIX, D.: *Grammaire du verbe français des formes au sens*, Nathan, 2002.
- MAINGUENEAU, D.: *Approche de l'énonciation en linguistique française, embrayeurs, « temps », discours rapporté*, Paris, Hachette, 1981.
- : *Linguistique pour le texte littéraire*, Nathan, 2003, (1e éd. 1986, Bordas).

- : *L'Enonciation en linguistique française*, Paris Hachette, 1994.
- MOESCHLER, J. et Anne REBOUL: *Dictionnaire encyclopédique de Pragmatique*, Seuil, 1994.
- MULDER, W. de et Co VET, (éd): “Temps Verbaux et relations discursives”, *Travaux de linguistique*, 39, DUCULOT, 1999.
- MOLENDIJK, A. : *Le passé simple et l'imparfait : une approche reichenbachienne*, Amsterdam/Atlanta, Rodopi, 1990.
- : « Anaphora et imparfait : de la référence globale à des situations présupposées et impliquées », in *Cahiers Chronos*, 1, 1996, pp.109-123.
- 西村淳子 : 「tu の隠喩的用法について」, 名城大学一般教育人文研究会発行『名城大学人文紀要』第38集23巻1号, 1987, pp.65-79.
- 「動詞時制から見たテキスト構成の手法— 「説明」時制, 「語り説明」時制の分布と物語りの全体構成—」, 『武蔵大学人文学会雑誌』第30巻第2・3号, 1999年。
- 「動詞時制から見た物語りの多元的構成— 「語り」時制 / 「説明」時制の局所的交替が生み出すテキスト効果—」, 『武蔵大学人文学会雑誌』第31巻第1号, 1999年。
- 「テキストの時制分布と連関の形—テキスト言語学の方法—」, 『武蔵大学人文学会雑誌』第36巻第1号, 2004年。
- PARTEE, B.H.: “Some Structural analogies between tenses and pronouns in English”, *Journal of Philosophy* 70, 1973, pp.601-609.
- : “Nominal and temporal anaphora”, *Linguistics and Philosophy* 7, 1984, pp.243-286.
- RABATEL, A.: *La Construction textuelle du point de vue*, Lausanne, Delachaux et Niestlé, 1998.
- REBOUL, A. , J. MOESCHLER: *Pragmatique du discours, De l'interprétation de l'énoncé à l'interprétation du discours*, Armand Colin, Paris, 1988.
- REINHART, T. “Principes de perception des formes et organisation temporelle des textes narratifs”, *Recherches linguistiques de Vincennes*, 14-15, 1986, pp.45-92.
- RIVARA R. : *La langue du récit. Introduction à la narratologie énonciative*, Paris, L'Harmattan, 2000.
- VET, Co : *Langue française* 67, La Pragmatique des Temps Verbaux, 1985.
- « Les temps verbaux comme expressions anaphoriques : chronique de la recherche », *Travaux de linguistique* no.39, Duculot, 1999.
- VETTERS, C. : *Temps, aspect et narration*, Amsterdam/Atlanta, 1996.
- VUILLAUME M. : *Grammaire temporelle des récits*, Paris, Editions de Minuit, 1990.
- WILMET, M. : « L'imparfait ; le temps des anaphores ? », in W. DE MULDER, TASMOWSKI-DIRYCK, L., C. VETTERS (éds), *Anaphores temporelles et (in)cohérence*, Amsterdam-Atlanta, Rodopi, 1996, pp.199-215.
- WEINRICH, H.: 『時制論』, 脇阪豊, 大瀧敏夫, 竹島俊之, 原野昇訳, 紀伊国屋書店, 1982年。
Le Temps, Traduit par M. LACOSTE, Seuil, Paris, 1973.

註

- 1) シャランドー、マンガノーは「直示」を以下のように定義している。

“ce terme désigne un des grands types de référence d’une expression, celle où le référent est identifié à travers l’énonciation même de cette expression.”

(CHARANDEAU, P. et D. MAINGUENEAU: *Dictionnaire d’analyse du discours*, 2002, p.156.)

「この語は、ある表現の指示対象がこの表現の発話を通じて確定されるような指示の大きなタイプの一つを指す。」(P. シャランドー、D. マングノー『談話分析辞典』p.156)。

「直示」という概念はカール・ビューラーによって提唱された。ビューラーの研究や直示的な空間表現の研究は、R.J. JARVELLA, W.KLEIN (ed.), *Speech, place and Action, Studies in Deixis and related topics* に詳しい。

「直示」や「照応」などの現象は、ソシュールの記号観との関係で重要な意味をもつ。ソシュールによると、記号の価値(シニフィエ)は、いつ、どこで、誰が話すかという個々の発話行為を捨象し、恒常的であるが、それ故に科学の対象となりうる。現実にはすべてが個別的な事象であるが、これをそのまま個別的な事象として記述するのではなく、一般化して捉えることができて初めて、別の現象にも応用可能な科学的な知識となりうる。つまり、個別の発話行為からの独立が言語の客観性の根拠であり、人文科学の対象としての資格を得る条件であったはずである。ところが、話者の発話行為を最初から前提にして、それを介してしか価値の決まらない記号が体系の中に存在することは、この根拠を大きく揺るがしかねない。しかし、この問題は、談話を発話行為の中で捉え、言語活動の重層性を考慮することによって乗り越えられうる。発話行為自体、ソシュールが言うように完全に個別のものではなく、ある程度一般化して捉えることができるからである。したがって、構造主義以降の言語学は、多かれ少なかれ発話行為を考慮せざるをえなくなったのである。
- 2) Perrault: <http://www.chez.com/feeclochette/perrault.htm>
- 3) どんな記号も状況や文脈との関係で異なる使い方ができるので、これ以外の使用法ができないわけではない。実際に特定の記号がどのように使用されるかは、使われた言葉の中でしか確定できない。このことは、je や tu のように使用法によって定義される記号も例外ではない。(拙稿「tuの隠喩的用法について」、1987年)。
- 4) この文体をバンヴェニストは「^{ディスコース}談話」と呼んで「歴史」と対立的に捉えている。(BENVENISTE, E.: “Les relations des temps dans le verbe français”, *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966, pp.237-250) しかし、他方でバンヴェニストは、ラング/パロールの対立でも「談話」という用語を使用している。後者の方が上位概念であり、一般的にも受け入れられているため、ここでは混乱を避けるため、「語り」や「歴史」に対立する文体は、ヴァインリヒに倣い「説明」、および「説明」時制と呼ぶ(H. ヴァインリヒ, 『時制論』, 脇阪豊他訳, 紀伊国屋書店, 1982年)。
- 5) 時制を照応現象と関係付けて捉えようとする試みは、以下の文献に詳しく紹介されている。PCADIOT と A.ZRIBI-HERTZ, Présentation, *Langages*, no.97, mars 1990, Larousse. また、W. de MULDER, et Co VET, (éd): “Temps Verbaux et relations discursives”, *Travaux de linguistique*, 39, DUCULOT, 1999. 中の Co VET, “Les temps verbaux comme expressions anaphoriques; chronique de la recherche”, L.GOSSELIN, *Sémantique de la temporalité en*

français, pp.113-119.

- 6) Le Monde - les titres du jour - Jeudi 22 décembre 2005.
 7) 「実現」(actualisation)とは、記号が使用されることによって、談話の世界における特定の価値を得ることを言う。

“ACTUALISATION: Notion apparue chez C. Bally et G. Guillaume dans l’entre-deux-guerres;/.../ “Actualisation” est solidaire des distinctions du type langue / parole. On se réfère en général à C.Bally (1965;82) ”L’actualisation a pour fonction de faire passer la langue dans la parole; c’est par l’actualisation modale qu’un ou plusieurs mots exprimant une représentation deviennent une phrase (la phrase est l’acte de parole par excellence), c’est aussi par l’actualisation que les signes de la langue peuvent devenir des termes de la phrase.” P. CHARANDEAU, et D. MAINGUENEAU, 前掲書, p.27. 『『実現』: 両大戦間に C. バイイと G. ギョームにおいて生み出された概念。ラング / パロールのタイプの区別と関連している。通常 C. バイイ (1965;82) を参照する。『実現はラングをパロールに移すという機能をもっている。ある表象を表す語, または語群が一つの文となるのは, 様態の実現によるものであり (文は当然パロールの行為である), ラングの記号が文の要素となりうるのも実現によるものである。』』

- 8) マングノーは次のような例を挙げて、現在と半過去の平行的な関係を説明している。
 MAINGUENEAU, D. : *Approche de l’énonciation en linguistique française, embrayeurs, « temps », discours rapporté*, 1981, pp.64-65.

- René mange (=est en train de) sa soupe. (ルネはスープを飲んでいる)
- René mangeait (=était en train de) sa soupe. (ルネはスープを飲んでいた)
- Paul arrive (=va arriver) (もうすぐポールが到着する)
- Paul arrivait (=allait arriver) (もう少しでポールが到着するところだった)
- Luc arrive (= vient d’arriver) (リュックは到着したところだ)
- Luc arrivait (= venait d’arriver) (リュックは到着したところだった)
- Paul va arriver (ポールはすぐ来る)
- Paul allait arriver (ポールはもう少しで来るところだった)
- Jean vient de partir (ジャンは発ったばかりだ)
- Jean venait de partir (ジャンは発ったばかりだった)
- Tous les jours je fais la sieste (毎日私は昼寝をする)
- Tous les jours je faisais la sieste (毎日私は昼寝をしていた)
- Les Italiens aiment l’opéra (イタリア人はオペラが好きだ)
- Les Italiens aimaient l’opéra (イタリア人はオペラが好きだった)
- Marie est rousse (マリーは赤毛だ)
- Marie était rousse (マリーは赤毛だった)

- 9) “C’est le temps de celui qui relate les faits en témoin, en participant” E. BENVENISTE, 前掲書, p.244.
 10) 拙稿「動詞時制から見たテキスト構成の手法—「説明」時制, 「語り説明」時制の分布と物語りの全体構成—」1999年, pp.17-21。

- 11) LE MONDE DIPLOMATIQUE | JUILLET 2002 | Page 1
<http://www.monde-diplomatique.fr/2002/07/RAMONET/>
- 12) MAINGUENEAU, D. : 前掲書, p.57.
- 13) BENVENISTE, E., 前掲書, p.246.